

Title	イギリス文学における非ヨーロッパ像(1)
Author(s)	正木, 恒夫
Citation	大阪外国語大学学報. 64 p.397-p.414
Issue Date	1984-03-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80990
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

イギリス文学における非ヨーロッパ像 (1)

正 木 恒 夫

The Non-European Image in English Literature Part I

Tsuneo MASAKI

Being a belated attempt to turn the balance of power in the cultural communications between Europe and the rest of the world, not intended for anyone who does not read Japanese.

I 新 世 界

1. コロンブス

ジェノヴァ出身のユダヤ人コロンブスは、1492年10月12日、フロリダ南東洋上に展開するバハマ諸島中の1小島ウォトリング島に上陸、その地の住民とはじめて接触する。「旧世界」ヨーロッパによる「新世界」アメリカの「発見」である。ラス・カサスの伝える『航海誌』は、発見者コロンブスの印象を次のように記している。

…彼らは皆、母親が彼らを産み落した時と同じような状態の裸で歩いており、女達も同様でした。…誰も皆姿がよく、美しい体つきをしており、顔立ちもなかなかよいのです。中には黒く塗っている者もありますが、彼らは…黒くもなければ、白くありません。…彼らは皆そろって背丈が高く、顔つきもよく、よい姿をしているのであります。…彼らは利巧なよい使用人となるに違いありません。事実、私が彼らにしゃべることを、彼らはすぐに口にいたします。私は、彼らは簡単にキリスト教徒になると思います。私は、神の思し召しにかなうなら、この地を出発する時には、言葉を覚えさせるために、6人の者を陛下の下へ連れて行こうと考えております¹⁾。

この文章は単に、ヨーロッパが新世界について持った最古のイメージとして、歴史的な価値をもつばかりではない。そこには既に、これ以後ヨーロッパの新世界像にくり返し現われるいくつかの特徴が、驚くほど明瞭に観察できる。第1に、新世界の住民「インディオ」は、その外貌において、ヨーロッパ人に好印象を与える。彼らは見事な肢体をもつばかりでなく、肌の色が黒くな

い。いやむしろ、エスパニョーラ島のインディオについてコロンブスが誌しているように、ヨーロッパ人に似てほとんど白くさえある——「この地の者は男も女も、これまで見てきた中で最も美しく、色も非常に白い。この地は絶好の気候だが、かなり寒いこともあるのだから」と、コロンブスは続ける、「彼らも衣服をまとして太陽と大気から肌を守っていたならば、おそらくエスパニャの人と同じほど色白くなっていたことだろう。」(143) インディオに対するこの好印象はしかし、意外な展開をみせる——「彼らは利巧なよい使用人となるに違いありません。」つまりコロンブスはインディオを、その最初の出合いから、潜在的な労働力としてしかみていなかったことになる。コロンブスにとってインディオは、その美しい外貌の上に、裸で無防備だから、「命令を与えて、働かせ、種を播かしたり、その他必要なあらゆることをさせれば、まことに都合が良い者共なので」あった。(145) だが「裸」(つまりは未開)のままの状態で、インディオがすぐれた労働力になるわけではない。彼らにはまず「言葉」(つまりは「我らのロマンス語」(9))を覚えさせねばならず、さらには「彼らに村落を作らせ、衣服をつけて歩くことや、我々の習慣を教え」(145) ねばならない。それにももちろん、彼らをキリスト教に改宗させる必要がある。この上もなく「善良で、しかも従順な」(168) 彼らは、「簡単にキリスト教徒になると思います」とコロンブスは、こともなげにいつてのける。

見た目にもよく、素朴で従順なインディオたち。コロンブスがカトリック両王、アラゴンのフェルナンドとカスティリャのイサベルのために書き誌したこの好意的なイメージが、一転していまわしい食人や人身供犠にふける偶像崇拜者のそれに変わり、やがては人権を保証する必要すらない、アリストテレスの「先天的奴隸人」として、バリャドリの大論争の主題となって登場するまで、ものの60年とはかからなかった²⁾。そこにはもちろん、スペイン人のインディオに関する知見の拡大があり、両民族の関係の深化——というよりは深刻化があった。だが悲劇的というほかないこの出合いは、1つの民族と文化が他の民族と文化について、正当にしかつ正確なイメージをもつことの困難を、まざまざとみせつける。古来異文化接触ということが、それ自体を目的として行われたことは、ほとんどなかったといつてよからう。十幾世紀にもわたって積極的に異文化の摂取につとめてきた日本民族など、数少ない例外の1つといわねばなるまい。異文化接触は、多くの場合、征服ないしは交易にともなう、強制的又は偶然に行われてきた。(今日の世界においても、この事情に何ほどの変化があったわけではない。) スペイン人のインディオ像は、数千万に及ぶ人命と、何十という固有の文化を地上から抹消し去る、圧倒的な支配力が貫徹するなかで形成されたものである。数多くの良心的な聖職者や知識人の努力も、この事実を変えることはできない。

コロンブスはインディオを、潜在的労働力として眺める。増田義郎氏が説くように³⁾、又コロンブス自身が『航海誌』の序文にいう通り、インディアスへの西行の旅にける彼の宗教的情熱に、うそはあるまい。だが彼が『航海誌』に書きとめる観察においては、皮肉なことに、世俗的動機が先行しがちだ⁴⁾。コロンブスは何よりもまず、彼の発見にかかる島々が、いかに経済的な

魅力に富んだ土地であるかを、両王に向かって力説する必要があった。この経済的使命感が、コロンブスに、すぐれた潜在的労働力としてのインディオ像を、くり返し描かせることになる。同じことは、彼の自然描写についてもいえる。

今までに見た島々も非常に美しく、青々としていて、地味も豊かでしたが、この島ははるかにそれ以上で、高い樹木が青々として茂っていました。この島には大きな沼がいくつもあり、それを、すばらしい木立がとりまいて蔽っておりました。全島緑に包まれており、草木はアンダルシアの4月のように繁っていました。そして小島のさえずりを聞いておれば、誰もここから立ち去りがたくなるだろうと思います。(60)

イベリア半島からやってきたヨーロッパ人の目に、カリブ海のみずみずしい自然が、地上の楽園として映ったとしてもむりはない。だがラス・カサスによると、キューバ島に上陸したコロンブスは、「見事な木立、そのすがすがしいこと、すきとおった水、数々の島、快適な空気と、すべて全くすばらしく、まことに立ち去り難い思いであった」と述べたあと、同行者たちに向って、「ここで見たすべてを両国王に報告するには、舌が干あっても十分ではなく、またこれをそのまま記述する腕も持ち合せていない、全く魔法にでもかかっているようだ、といいながら進んで行った」という。(111) 問題はこうした表現に、どの程度誇張が含まれているかではなく、新世界の自然が、どのような角度から眺められた時、描写がこのかたちをとるのかということだ。なぜならこれ以後17世紀に至るまで、我々が航海記録や文学作品など、いたる所で出くわす新世界の自然描写は、おおむねこれの変奏の域を出ないからである。上の引用に続けて、コロンブスはこう述べる——「私は、この地からどれほど大きな利得が得られるかというようなことを、ここに記述することはいたしません。しかし、両陛下、このような土地柄のところには、確かに有益なものが無限にあるに相違ないのであります。」(111) ほとんど幻想的と思えるほどの楽園描写の裏側に、冷徹な経済的打算がある。いやむしろ、航海そのものを可能にした経済諸勢力⁵⁾の熱い期待を背後に感じる時、必然的に、新世界の自然を、無限の経済的可能性をひめた楽園として描かざるをえなかったというべきだろう。以後数世紀にわたって、コロンブスの自然像が無限に再生産されていったとすれば、それはもちろんコロンブスの直接的な影響ではなく⁶⁾、航海者たちがひとしく、彼の経済的使命感をわけもっていたからに他ならない。

コロンブスに端を発する「食人神話」ですら、次第に経済的な色彩を帯びていった過程については、既に増田・アレonz両氏の指摘がある⁷⁾。食人種のうわさをはじめて耳にする（といっても、会話はほとんど手真似で行われているのだが）のは、コロンブスがカリブ海域に到着して24日目、11月4日のことであった。コロンブスは数人の老人からボーオという土地（これはコロンブスの誤解で、「ボーオ」というのは「住居」を意味する原地語であった）には、「1つ目の人間や、犬のような鼻面をしていて、人を喰う人間がおり、人をつかまえるとすぐに首を切り、血を吸い、生殖器を切り落す」という話を聞いた——いや、そう「いっているように解せた。」

(80)同じ話は『航海誌』に、この他4度あらわれる。(101, 107, 133, 205) 食人種の名は最初、カニーバルとも、カニーバまたはカニーマとも聞こえ、最終的には小アンティル諸島に住むカリベ族と同定されるが、コロンブスが聞き違えた名前の1つ(カニーバル)は、やがて「食人種」を意味する普通名詞となって、ヨーロッパ諸語の中に定着する。「1つ目の人間」といい、「犬のような鼻面」といい、インディオの手真似を解説するコロンブスの異文化理解に、中世以来の空想的な世界像が、その影を落していることは明らかだが⁸⁹⁾、しかしコロンブスはこの種の情報をうのみにしていたわけではなく、むしろ懐疑的でしたらあったことは、11月26日付のラス・カサスの要約(「提督は、彼らのいうことはうそだと考え…」(107))からもうかがうことができる。そのコロンブスが、第2次航海では、一転して食人種存在を確信するにいたるのは、同行の医師チャンカ博士の書簡が詳述する「物的証拠」の目撃によるものであろう⁹⁰⁾。(もっともこの「証拠」自体、食人神話の粉碎におおむね成功したアレソズの方法によって、厳密な資料批判にさらされる必要のあるものだ。)だが次のようなコロンブスの、激越にしてしかも周到な提言を読むと、いささか首をかしげたくなる。

余は前記の食人種をはじめ、当地の者達の魂のためには、彼らをできる限り多数本国に連れ行くことが有益であると考えついた…当地では本国から到着する者達を維持するためにも、またこれらの島々のためにも、家畜や役獣がまことに必要であるが…これらの代価は、この未開の、気概のある、しかも姿よく、非常に利潑な食人種の奴隷をもって支払うことができるであろう。彼らは、かの非人間的な習慣さえ除けば、他のどの奴隷よりも優秀であり、その悪習も、彼らがこの地を離れば直ちに喪失するものと考えられる。彼らは、当地で我々が建設しようとしている櫓付きのフスタ舟で、多数に捕えることができるのである¹⁰⁾。

わけでも注意をひくのは、食人種が、その非人間的な習慣さえのぞけば、むしろ他の人種よりもすぐれた労働力になりうるという論理だ。なぜならこれよりおよそ400年後、イギリスの作家コンラッドの中篇小説『闇の奥』(*Heart of Darkness*, 1902)の中で、これと全く同じ論理が、大西洋をへだてたアフリカ・コンゴ地方の「食人種」に対して適用されているのを見るからである¹¹⁾。

イギリス文学を表題にかかげた文章の中で、いささかコロンブスに深入りしすぎたかもしれない。だがコロンブスの体験は、新旧両世界接触の原点を形作るばかりでなく、その『航海誌』は、ヨーロッパにおける新世界像の原型として、普遍的な性格をおびている。たとえば16, 7世紀のイギリスにおける新世界像も、歴史・地理・植民地政策など諸条件の相違にもかかわらず、ほぼ『航海誌』の枠内におさまってしまうものである。イギリスはスペインより1世紀近くも遅れて、アメリカ大陸における植民地獲得競争に参加する。そのイギリスに、原住民との最初の接触記録をもたらしたのは、1584年、ウォルター・ローリーの命を受け、後のヴァージニア植民地に到達

した2人の船長だった。彼らを出迎えた人々は、姿かたちといい、立居振舞といい、いささかもヨーロッパ人に劣るものではなく、また土地は肥沃で香しく、かつてみたこともないほど自然の恵みにあふれていた。それは文字通りの楽園であった。汚れを知らぬ人々は「黄金時代 (the Golden Age)」さながらの生活をいとなみ、「天地創造の時 (the first creation)」そのままの自然から、一切の労苦なしに、必要な物を全て得ていたのである¹²⁾。だがそれからわずか23年後、創設直後のヴァージニア、ジェームズタウン植民地から、指導者の1人ジョン・スミスが伝えるインディアン像には、そのような楽天性はひとかけらも残っていない。原住民との紛争のさなかに捕虜となり、王ポウハタンの娘ポカホントスの捨身の行為によって一命を取り止めたといわれるこの人物にとって、彼の処遇を呪術によってきめるべく、呪文をとえ、かつ踊りまわるインディアンが、「さながら悪魔」¹³⁾のようにみえたとしても、むりはあるまい。しかしその一方で、豊富に提供される食物をみてジョン・スミスが、「肥らせたあげくに食べられるのではないか」¹⁴⁾と考えたとすれば、彼は既に「食人種インディアン」という当時の固定観念に冒されていたことになる。本国の思想家ベーコンですら、「西インドのカニバルたちが人肉を食することには、疑問の余地がない」と述べ、その悪習をもつ以上、スペイン人によって征服されてもやむをえないと考えていた時代のことであった¹⁵⁾。

にもかかわらず、イギリスの航海者や植民者が本国にもたらした新世界像は、概して楽天的なものであったと考えることができる。もっともある時期には一種の報道管制がしかねばならなかったし、誕生まもないヴァージニア植民地のために国民諸階層の支持をとりつける目的で、教会の説教壇が利用されたこともあった¹⁶⁾。それとの因果関係はともかく、この時代のイギリス文学は、しばしば滑稽なまでに理想化された新世界像にこと欠かない。ジェームズタウンに向かう植民者たちに捧げられた、詩人ドレイTONの頌詩が、ヴァージニアを「地上唯一のパラダイス」と称え、働かずして年4度の収穫がえられるほどの桃源郷として描いているのは当然のこととして¹⁷⁾、ほぼ同じ頃上演された喜劇『東行きはこちら (*Eastward Ho*, 1605)』においても、ヴァージニアは、油受けからしびんに至るまで黄金ずくめという、文字通りの黄金郷として登場するばかりでなく、「捕吏も廷臣も、三百代言も政府のスパイもいない」一種の政治的ユートピアとしても示される¹⁸⁾。さらには劇作家フレッチャーにとって、西インド諸島は「風立てばすなわち芳香漂う」「祝福された島々」であり¹⁹⁾、荒々しい天候のため魔の島として恐れられたバーミューダ諸島ですら、詩人マーヴェルの筆にかかると、「とこしえの春、万物をいろどり…葉陰に明るいオレンジの実が、緑の夜を照らす金色のランプのよう」な、夢の園に早変わりしてしまう²⁰⁾。

こうしたいわば皮相な新世界像から少し距離をおいて、新世界発見の意義について独自の思索を展開していたのが、ヨーロッパの幾人かのヒューマニスト思想家だった。たとえばトマス・モアは、アメリゴ・ヴェスプッチの4度にわたる航海の記録から着想をえて、『ユートピア』を書いたといわれる。モアにユートピアの話を聞かせるヒスロディは、3度までもヴェスプッチと行を共にし、最後の航海に自ら希望してブラジルに残り、奥地を探検するうちに偶然ユートピアを

発見したことになっている。第2部でヒスロディが詳述するユートピアの諸制度には、ヴェスプッチの伝えるインディオ社会といくつかの共通点があり²¹⁾、とりわけインカ帝国との類似を指摘する学者もあるが²²⁾、『ユートピア』は全体として、当時のイギリス社会の裏返しとしての、超合理的反社会の見取り図であって、新世界そのもののイメージとはいいたくない。それよりはむしろ、イギリス人ではないが、新大陸の実相について知識をたくわえつつ、それに密着するかたちで思考を深めていたもう1人の思想家が、我々の注意をひく。16世紀後半の十数年間に、ほう大な『エセー』を書きためつつあったモンテーニュである。このフランス人を通して我々はやっと、当時イギリス最大の劇作家シェイクスピアにたどりつく。その最晩年の作品『あらし (The Tempest, 1611)』は、モンテーニュの新世界像の検討を含む、すぐれて思想的なドラマである。

2. 『あらし』

ミラノの公爵プロスペローは、自然秘法の研究に没頭して政務をおろそかにするうち、ナポリの王アロンゾーの支援の下、弟アントニオがたくらんだクーデターによって、娘のミランダと共に、ミラノを追放される。娘とただ2人、小舟に乗せられたプロスペローは、老臣ゴンザーロのはからいで、無事絶海の孤島に漂着するが、そこにプロスペローがみいだしたのは、木の幹にとじこめられた空気の精エアリアルと、悪魔が魔女に生ませたという奇怪なキャリバンとであった。プロスペローはエアリアルを解放して自己の支配下におき、次にキャリバンを教育しようとするがはたさず、魔術を用いて強制的に使役する。こうしてプロスペローが島の支配権を確立してから、12年の歳月が流れる。ちょうどその頃、娘をチュニス王に嫁がせたナポリ王アロンゾーが、息子ファーディナンド、弟セバスティアン、その他アントニオやゴンザーロなどを伴って、帰路この辺りにさしかかった所、風向きが変わって船がプロスペローの島に吹きよせられる。それを知ったプロスペローは、魔法の嵐を起こして船を沈め、一行を島に上陸させた上で、過去の清算にとりかかる。その内容は、ナポリ王子ファーディナンドを娘ミランダと出合わせて、2人を夫婦として結びつける一方、父親のアロンゾーには、一定の試練を与えた上で悔悛と、ミラノ公爵領の返還を約束させた後、息子ファーディナンドと再会させ、ミランダとの結婚を承認させるというものだった。この計画の実現によって、クーデターをめぐる生じた葛藤を、一挙に解消しようとしたのである。ところが予想外の事件が発生し、プロスペローは計画の実行とは別に、それへの対応に忙殺されることになる。それは2つの——王弟セバスティアンとアントニオのアロンゾーに対する、そして2人のナポリ人と結んだキャリバンのプロスペローに対する——クーデター未遂事件である。しかしプロスペローは空気の精エアリアルを使って、クーデター計画を2つながらあっけなく崩壊させ、参加者をそれぞれ罰した上で、計画通りに、大団円を実現するのである。

このあらすじのどこを探しても、新世界はみあたらない。ドラマの舞台はヨーロッパであり、その中心的な葛藤は、貴族たちの政治抗争である。プロスペローの島の位置は明らかにされて

いないが、多かれ少なかれ、ナポリとチュニスをつなぐ線上にあるとすれば、論理上、地中海のほぼ中央に位置することはまちがいない。にもかかわらずなぜこの作品が、新世界にかかわりをもつドラマだといえるのか。それはシェイクスピアが、プロスペローの島の彼方に新世界がほの見えるような、あるいはだまし絵のように、角度を変えてみれば地中海の島が新大陸の一部に見えるような、手のこんだ仕掛けをほどこしているからである。

まずこの作品は、その名の通り、嵐で幕をあける。シェイクスピアはこの嵐の着想を、初演当時センセーショナルな話題になっていたに違いない、現実の嵐からえたというのが、通説になっている。それは『あらし』初演の2年前、1609年に、ジョージ・サマーズにひきいられヴァージニアに向けて航行中の船隊が、バーミューダ沖で暴風雨にあい、旗艦のみ島に漂着、乗組員はおよそ1年を島ですごした後、手製のボートで無事ヴァージニアに到着するという事件であった。従って幕開きのきわめてリアルな嵐の場面を見守る観客の意識の中で、舞台がバーミューダの荒海と二重写しになっていたとしても、さほどの不思議はない。こうしたイメージの一種のふれを、シェイクスピアはそれ以後の場面でも利用する。（これも又通説である。）例えば島の博物誌が、どことなく新世界を連想させるようなイメージの累積によって出来上がっている——淡水泉・鹹水泉・淡水性ムラサキイガイ・落花生・カケスの巣・マーモセット・ハシバミ・カモメ等々。落花生とマーモセットはともかく、それ以外は新世界の特産ではないが、これらのディテールの多くが同時代の旅行記にも登場することは、既にコーリーの精細な調査によって明らかにされている²³⁾。こうした島の細部を描きだすのは、ほとんどの場合、異形の住民キャリバンのセリフである。従って島のイメージが新大陸のそれに接近すればするほど、先住民キャリバンのイメージも又インディアンのそれに接近する。とりわけキャリバンが「川をせきとめて魚を取るのも、もうやめだ」と反逆の歌をうたう時（2幕2場）、この悪魔の落し子の奇怪な姿が、新世界の住民インディアンと二重写しになるはずだ。なぜなら川をせきとめて魚を取る方法は、インディアン独特の漁獲法として、当時植民者の報告を通じてイギリスでも知られていたからである²⁴⁾。

もしこのように、キャリバンの背後にインディアンの姿がみえかくれしているとすれば、島の支配者プロスペローとキャリバンの関係にも、新たなニュアンスがつけ加わる。例えばキャリバンの次のようなセリフが、被征服民の論理として現実性をおびはじめるのである。

この島はおれのものだ。お袋のソクラックスからおれがうけついだものだ。それを取り上げてしまいやがった。初めのうちは、さんざ猫可愛がりをしてよ、草の実入りの飲み物をくれたり、物の名を教えてくれたり——昼間もえてる大きな光が何、夜にもえる小さな光が何ってな。それでおれもお前が気に入っちゃって、島中のことを教えてやった——真水のわく場所、塩水の出る穴、こえた土地にやせた土地…それが今じゃ、どうだ、王様だったおれが、お前のたった1人の家来で、この固い岩の豚小屋に放りこまれる始末だ。そうしといておれの土地は、猫ばばしたままじゃないか。（1幕2場・訳文は以下全て筆者）

もちろんプロスペローの側には、キャリバンを奴隷化するについて、娘ミランダに対する暴行未遂という口実がある。また父親以上に謹厳なミランダによれば、キャリバンには悪への本能的な志向があり、およそ教育への努力を受けつけない「劣悪な種族 (vile race)」(1幕2場)であって、「投獄以上の罰に価する」存在である。このようにキャリバンは、作品の倫理的テーマのレベルでは、人間性の図式化ともいうべき人物配置の中で、陶冶不能の悪を体現する役割を負わされている。それにシェイクスピアは、プロスペローの「白い」(つまり、宗教的に無害な)魔術の免罪を保証するために、悪魔と交わる「黒い」魔術師としての、魔女シコラックスとその子キャリバンを必要としたともいえよう。だが一方でシェイクスピアが、キャリバンのセリフの中に、新世界的イメージをもぐりこませた結果、たてまえとしての倫理的な人物関係の裏側に、新世界における征服者対被征服者、すなわちヨーロッパ人植民者対原住民インディアンの関係が、すけてみえることになる。実際この角度からキャリバンのセリフをみると、土地の収奪といい、生活手段における原住民への依存といい、あるいはまた、初期の友好関係がやがて敵対関係に転じる植民者対原住民の接触過程といい、新大陸植民地の実態を、驚くほど正確に反映していることがわかる。しかも同時にシェイクスピアは、キャリバンをめぐるもう1組の人物関係を設定して、プロスペローを中心とする主筋のパロディー化を試みるのである。キャリバンは2人のナポリ人を扇動して、プロスペローに対する反乱を企てるが、その2人というのが、大酒飲みのステファノーと道化のトリンキュローであり、当然のことながら、そこには滑稽な脇筋が展開することになる。しかしこの脇筋は、単に滑稽というのではなく、主筋と同様、新世界を下敷にした二重構造をもっていることが、すぐにわかる。最初の出会いでキャリバンは、ステファノーを地上に降り立った月の男と取り違え、ステファノーもそれを否定しない。このことといい、またステファノーがキャリバンにおどう酒の味を教えることといい、いずれも航海者たちの実際の体験に基づくものであることは、既にしばしば指摘されている²⁵⁾。但し素材の扱い方はきわめてシェイクスピア的であり、例えばステファノーがキャリバンの口におどう酒のびんを押し込みながら、「さあ、ニャン公、口を開けな。こいつを飲めば言葉がしゃべれるようになるぞ。」(2幕2場)というくだりなど、言語教授をめぐるミランダの厳かな断罪(「私はお前に一所懸命言葉を教えてやった…野蛮なお前が、ただもうわけも分からず、ガチョウみたいにガアガアやっていたのを、それはこういえばいいのよと、言葉を教えたわ。お前はそれを覚えはしたものの、そのねじまがった根性が…」(1幕2場))の、強烈なパロディーになっている。(酔っ払ってできるのは、くだをまくことだけである——言語の価値の下落。)それだけではない。プロスペローの寝込みを襲うべく、その寝所をめざすクーデター一味の行く手に、主人の命を受けたエアリアルが、金ぴかの安っぽい衣服などを並べておく。キャリバンはそれに目もくれず先を急ごうとするが、ステファノーとトリンキュローはそのとりこになってしまい、奪い合うように金ぴかの代物をかき集める。ここには原住民とヨーロッパ人の、立場の逆転がある。そうした安っぽいがらくた(‘trumpery’——幕1場)で原住民の歓心を買おうとしたのは、他ならぬヨーロッパ人だったからであ

る。あるイギリスの学者は、脇筋のこうした展開をさして、これは「植民者と原住民の関係に対する適確な批判」になっており、『ガリヴァー旅行記』におけるスウィフトの風刺もこれに及ばないとまで言い切っている²⁶⁾。

このようにシェイクスピアは、いわば透絵の技法を用いて、ヨーロッパを舞台とするドラマの裏側に、新世界に関する独自のイメージを描いた。このイメージはいくつかの点で、同時代の文学における、常識的な新世界像とは異なる。第1にそれは、理想化された楽園のイメージを含まない。第2に、自然条件の描写が、博物誌的に細密で正確である。そして第3に、新大陸「発見」が生み出した新しい人間関係に対する批判的洞察を含む。これだけをみても、『あらし』の新世界像は、画期的な意味を持つといえることができる。しかし作品の中心テーマからすると、それは副次的な位置をしめるにすぎない。『あらし』の中心的な葛藤は、先にもふれた通り、貴族の権力闘争である。それをシェイクスピアの問題意識にひきつけていかえるなら、権力悪による連帯の破壊ということになる。『あらし』における、あるいは「ロマンス劇」と総称される晩年の作品群における、シェイクスピアの課題は、いったん破壊された連帯を、どのようにして回復するかということであった。戯曲のレベルでは、それは、悲劇的な結末を志向する劇的葛藤を、どのように処理して大団円にもちこむかという、作劇上の問題を提起する。『あらし』に先立つ3つの作品（『ペリクリーズ』『シムベリーン』『冬物語』）の中で、シェイクスピアが用いた方法は、さまざまな人力の介入・時間の経過による人間の変化・世代の交代などであった。それらの方法は、偶然的とまではいえないまでも、客観条件の変化に依存する所が大きく、葛藤の中心に位置する人物すなわち主人公の主體的な努力による自己回復力を、保証することはできなかった。そこで『あらし』では、地中海上の架空の島という、いわば抽象的な空間を設定し、そこで主人公プロスペロー自らの力による、連帯回復の実験を行おうとする。この実験の課題の1つが、新世界ユートピアの有効性の検討であった²⁷⁾。

2幕1場、つまり作品の3つめの場面で、島に漂着したナポリとミラノの貴族たちは、当然のことながら、何はともあれ地理的状況の把握に努める。ところがどういうわけか、それがなかなかうまくいかない。「どうやらこの島には人の住む気配もなく…」という、廷臣エードリアンの言葉に始まるこの部分は、およそ20行にわたってセリフのやりとりが続くのだが、エードリアンと老臣ゴンザーロによる風景描写が、セバスティアンとアントニオという、この劇の悪役たちにたえずまぜかえされる結果、島のイメージが焦点を結ばないのである。「このそよ風のかぐわしい息遣い」とエードリアンがいえば、「なるほど、風にも肺があるとみえる——えそにやられちゃいるが」とセバスティアンがいい、「それとも香水がわりにメタンガスでも使ったか」とアントニオがいう。「それにまあこの草の青々とよく茂っていること。あのつやつやした緑をごらんなさい」とゴンザーロがいうと、「どうしてどうして、地面はからからの薄茶色」「青臭いのはこの御老体ぐらいのものさ」とまぜかえす。そうしたやりとりのしばらく後で、ゴンザーロが突然、「もし私にこの島の植民 (plantation) をおまかせいただけますなら…」と切り出した上、18

行にわたってモンテーニュのユートピア論を引用するのを聞かされると、この作品の透絵的二重構造によって、島の地誌に関する先程のやりとりが、新世界のどこかの島に上陸した航海者たちの会話のようにも聞えはじめ、イタリア貴族たちの姿が航海者たちのそれと、二重写しになりはじめるのである。そしてここでも我々の注意をひくのは、シェイクスピアが、新世界のイメージの固定化をさけようとしている事実であろう。

さて、ゴンザローはいう――

私の国では何もかも、今とはあべこべに致します。商売は御法度、裁判はとりやめ、文字は廃止。貧富の差がありませんから、人が人に仕えるということもない。契約・相続・私有地も禁止。畑もぶどう園もありません。金属・穀物・ぶどう酒・油はこれを用いず、男どもは働かないのでのんびりと暮らします。いやそれは女も同じことで――但し悪にはそまらず、清らかです。国王はこれを置かず…自然が万民の必要をみたくれますから、額に汗して働くことはありません。反逆罪や重罪もなく、剣・槍・短剣・鉄砲その他武器は一切不必要。とりどりの自然の恵みが豊かにみちて、我が無辜の民をうるおしてくれます…かく申す私、かの黄金時代もかくやと思われるほど、立派に治めてみましょう。(2幕1場)

ゴンザローのこのセリフが、モンテーニュの『エッセー』第1巻31章「食人種について」の1節を、フローリオの英訳(1603年刊)によって、きわめて忠実に引用したものであることは、古くから知られてきた。もっとも細部に若干の異同がないわけではなく、またモンテーニュがこのユートピアを、さまざまな資料から知りえた南米インディオ社会の現実として描いているのに対して、シェイクスピアではそれが、今後実現されるべき理想像として提出されていることが、我々の注意をひくが、そのことはさしあたり問題ではない。ここでの問題はむしろ、シェイクスピアが、航海者たちが描く楽園図の無批判な再生産ではなく、他ならぬモンテーニュの引用によって、『あらし』と新世界との結びつきを決定的なものにしていることであろう。モンテーニュは『エッセー』の少なくとも4つの章(第1巻31章「食人種について」・同36章「衣服をまとう習慣について」・第2巻12章「レイモン・スボン弁護」・第3巻6章「乗り物について」)において、新大陸発見が提起する問題をさまざまな角度から論じている。その論点は、従来しばしばされてきたように、ヨーロッパ思想における原始礼賛の系譜と結びつけることだけで、評価しつくせるものではない。モンテーニュが利用した地誌・航海誌の類は驚くほど豊富であり、また知見の拡大につれて論調も微妙に変化するが²⁸⁾、モンテーニュの偉大さは、そのようにして実相の把握に努めながら、インディオの「裸体」や「食人」などの否定的な(それ故支配の口実に使われた)イメージを正面からとりあげ、それを逆手に取りながらヨーロッパの政治と文化について、大胆な批判を展開した所にあった。そのモンテーニュのユートピア的な新世界像を、シェイクスピアは『あらし』において引用する。それは『あらし』という作品の思想的な広がりを示して余りある

事実だが、シェイクスピアのモンテニユに対する評価は、この作品に関する限り、否定的である。その理由は、よくいわれるように、ゴンザーロの理想論が、例の通り悪党たちに茶化されたり、島の現実と、そこに展開する人間関係によって裏切られたりすることだけではない。シェイクスピアはモンテニユのユートピアに対して、もう1つのユートピアを対置し、しかもその双方を否定してしまうのである。

島の現実を支配するのは、いうまでもなくプロスペローであり、その支配力の秘密は魔術——ルネサンス知識人の心を深くとらえた、あの自然秘法であった。プロスペローはこの魔術を用い、天地の霊に命じて、疲労困憊した貴族たちの前に、珍味の数々を並べさせる（3幕3場）。異形の霊たちを目のあたりにした貴族たちが、それを島の原住民と取り違え、怪物の存在を伝える旅行記なども、これからは信用せざるをえまいなどといった混乱ぶりが、再び透絵の技法によって、彼らの姿を航海者たちと二重写しにするのだが、食物の方はウェルギリウス（『アイネーイス』）にならって、有翼の怪物ハルピュイアの姿をしたエアリアルにさらわせてしまう。これはいわば魔術のデモンストレーションであり、プロスペローはこの魔術を使って4幕1場で、ファーディナンドとミランダの前に、彼自身のユートピアのヴィジョンをくりひろげて見せる。それは、古典ヨーロッパの文学伝統につながる、牧歌的ユートピアである。ここでプロスペローは、エアリアルを通じて諸霊をあやつり、若い2人のために祝婚のマスク（舞踊劇）を演じさせる。虹の女神イーリスに続いて、神々の女王ユーノーが登場し、次に2人のよびかけに応じて豊穡の女神ケレースが現われる。そこでケレースが婚姻を祝福して歌う歌は、数千年来農民が夢みたユートピアである——「地の幸いや増し、納屋に穀物みち、ぶどうたわわに実り、麦の穂たれる。収穫の秋、春につらなり、物皆みちたりるべし。これケレースが祝言なり。」さらに、日やけした農夫たちが、とりいれ時のいでたちをしてニンフたちと共に登場、互いに手を取ってひなびた踊りを踊る。その牧歌的な情景がファーディナンドをして、まるで‘paradise’のようだと呼ばせたとしても、不思議ではない。ところが次の瞬間、プロスペローは突然術を中断し、ユートピアは「奇妙にうつろなざわめき」と共に消え失せてしまう。キャリバン一味によるクーデター計画——つまりは島の現実を思いだしたのである。だとすると、プロスペローの絶対的な支配力によって有効性を保証されているかにみえた牧歌的ユートピアも、現実の前には無力であったことになる。しかもプロスペローには、それにこだわる風がない。いやむしろ逆に、例の有名なセリフ（「余興は終わった。役者は皆……ただの空気に戻ってしまった……」）の中で、自らの術の虚構性を確認しさえする。おまけに大団円に続くエピローグでは、プロスペローは生身の俳優に戻り、魔術を含む一切が芝居——つまり、役者と観客の相互了解の上からくも成り立つ、かりそめの世界にすぎないことを、あっさりと認めてしまう。現実社会における葛藤の解決は、ドラマの中において、ドラマの方法を用いてのみ可能であり、一切のユートピアは、新世界のそれも含め、虚構にすぎず、従って無効である。ある意味ではドラマへの賛歌ととれるこの立場が、複雑な技法を駆使した実験的な思想劇『あらし』の結論であった。そして作品の裏側に忍びこませた新世

界のイメージは、その実験の、1つの重要な手順だったのである。

3. 『ロビンソン・クルーソー』

『ロビンソン・クルーソー (*The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe*)』(1719)の作者ダニエル・デフォーは、シェイクスピアの愛好者であった。そのデフォーが『ロビンソン』を構想するにあたって、『あらし』の影響を受けたというのも、決してありえないことではない²⁹⁾。2つの作品は、細部はともかく、状況設定が驚くほどよく似ている——暴風雨、絶海の孤島、主人公による「蛮人」支配と島の管理、そして主人公の母国への帰還。だがそこに描かれた新世界像を問題にする限り、これら2つの作品ほど、似て非なるものはない。なぜなら『ロビンソン』の新世界像は、『あらし』には片鱗すらなかった2つの要素を中心に成り立っているからである。2つの要素というのは、食人とキリスト教——より正確には、キリスト教による土着宗教の追放である。

このうちキリスト教については、時代の相違を考える必要があろう。新大陸進出の大義名分にキリスト教の布教をかかげた点では、イギリスもスペインその他の諸国と何ら変る所はない。例えばぼう大な航海記録の編さんによって知られたハクルートの従兄で、同名のリチャード・ハクルートは、1585年にまとめた「植民綱要」³⁰⁾の第1項に、「これら神なき民に宗教を伝え神の栄光を広めること」を掲げている。しかし比較的穏健な本国の宗教事情を反映してか、イギリス人として初めてインディアンと接触したアーサー・バーロウの記録³¹⁾には、偶像崇拜の記述はあっても、キリスト教の布教には全く関心を示していないし、同じことはヴァージニア植民地のコマーシャルともいうべきドレイTONの頌詩についてもいえる。シェイクスピアの『あらし』においても、キャリバン之母シロラックスは、南米パタゴニアの土着神セテボスの巫女としての一面を（例の透絵の技法によって）与えられているものの（1幕2場）、プロスペローがキャリバンに教えようとするのは言語と人倫であって、キリスト教ではない。インディアンに対するキリスト教の布教が、イギリスにとって現実的な課題になりはじめるのは、北米植民地の建設が軌道にのりだす17世紀の20年代以後のことであり、中葉から世紀末にかけて宣教師たちの生々しい体験記が次々に出版されて、この問題は、宗派をとわず、大きな課題になりつつあった³²⁾。『ロビンソン・クルーソー』はまさにそうした時代に書かれた作品であり、ピューリタンの作者の宗教的背景ともあいまって、『ロビンソン』がいわば戦闘的なキリスト教の立場から新世界をとらえる作品となったのも、むしろ当然のことであった。

では食人はどうか。食人が、コロンブス以来、ヨーロッパが新世界について描いた原像の一部をなすことは、既に述べた。この点については、シェイクスピアと同時代のイギリス人も、けっして消極的ではなかった。それに何より、モンテーニュの「食人種に関する」1章を作中に引用したシェイクスピアが、この問題に無関心であったとは考えにくい。それだけに『あらし』の中に、食人への言及が一切ないのは、興味深い事実である。（1667年にこの作品を、時代の嗜好に

あわせて改作した劇詩人ドライデンは、食人に関するセリフを2カ所までも、ちゃんとすべり込ませている³³⁾。)これに関連して古くからいわれてきたのは、‘Caliban’が‘can(n)ibal’のアナグラム(文字転換)ではないかということだが、キャリバンの描写には食人種を思わせる要素は一切なく、つとにファーネスが指摘した通り、臆説にすぎぬというべきであろう³⁴⁾。だとすれば、食人イメージの欠落は、『あらし』における新世界像のきわだった性格の1つといわねばならない。従って食人イメージの積極的な活用は、『ロビンソン』を『あらし』から決定的に区別する特徴であった。そして作者デフォーがこの点にける情熱は、何よりも作品の場面設定にみることができる。

ロビンソンの島も、架空の島である点では、プロスペローの島と何ら変る所はない。ただ我々はその地図上の位置を、正確に把握することができる。(事実『ロビンソン』の第4版には、この島を含む世界地図がそえられている。)その位置は、南米トリニダード島の東南東、ヴェネズエラの大河オリノコ川の河口である³⁵⁾。なぜほかならぬ、この場所でなければならないのか。従来ロビンソンのモデルと考えられてきたスコットランド人水夫セルカークが、4年4カ月に及ぶ孤独な歳月をすごしたのは、チリ沖合400マイルに位置する、ファン・フェルナンデス諸島中の孤島であった。デフォーはなぜそれを、南米大陸をはさんだ対角線上にあるオリノコ河口に移したのか。もっとも最近の学界はセルカーク=モデル説には消極的であり³⁶⁾、現代における代表的な評伝の著者 J. R. ムアなども、当時喧伝されたセルカークの体験談が『ロビンソン』の執筆動機であったことを否定している³⁷⁾。ムアによれば、デフォーはかねてから、オリノコ河口周辺の地域に深い関心を抱いていた。あたかも『ロビンソン』執筆と相前後して、デフォーは、戦争のため中南米貿易の途を断たれた南海会社 (the South Sea Company) に対し、オリノコ川以南のガイアナ地方の開発を進言している。そのことと、作品の舞台設定との関連をあながち否定するものではないが、作品にみる限り、ロビンソンの植民努力は、彼が漂着した架空の小島に限定されており、作者の経済政策的関心が作品に反映しているとは考えにくい。それよりも、作品の主導的な情念の1つが、作者をして他ならぬこの地点を選ばせたと考える方が、テキストそのものからみてむりがない。その情念とは、「食人種の教化」である。そしてデフォーにとってトリニダード島は、カリブ海に接する「食人種の島」であった。

ロビンソンの島に関する地理的認識を、筋を追ってみていくと、この島が食人種の国にとりまかれていなければならない必然性が、ひしひしと感じられる。漂着のおよそ1年後に、はじめて島の反対側に探索の足をのびしたロビンソンは、島の西方から西南西の方角にかけて陸地を望見する。その時ロビンソンの頭にひらめいた最初の考えは、もし船影をみかければ、それはスペイン領アメリカの一部だが、そうでなければ、それは南のブラジルに至る最悪の蛮地、捕えた人間を手当りしだいむさぼり食ってしまう人喰人種の住む地方に違いないということだった。(122)ロビンソンは一方では、土器の製造に成功し、木うすを作って麦をひき、はじめてのパンを手にするが、そのように安定に向かう島の生活の中でも、作者はそれを脅かす食人種の影を、片時も

忘れさせてはくれない。

この間私はこうした生活を取りまく危険について、ついぞ思いをはせることがなかった。蛮人の——いや考え方によってはアフリカのトラやライオンよりも性の悪い連中の手に落ちるかもしれないことだとか、もしそうなれば間違いなく殺される——どこか食べられてしまうのではないかということなど。そのくせ私はかねてから、カリブ海沿岸の住民はカニバルすなわち食人種だということを聞かされていたのである。(135-6) (訳文筆者)

この作品のクライマックスともいうべき、砂浜における足跡発見の直後、ロビンソンはまずそれを悪魔の足跡と考え、次いで「それ以上に危険な存在」であるところの「本土の蛮人ども」の足跡だと考える。(163) むろんそれは蛮人の足跡でなければならず、やがてロビンソンは食人の跡を発見し、遂には食人種フライデーを別の食人種の手から救出することになる。そのフライデーの口から（というのは、彼に英語を仕込んだ上での話だが）ロビンソンは、かつて見た陸地がトリニダード島であり、そこに住む人々が悪名高き食人種カリブ族であることを確認する(217)のだが、その際作者デフォーにとって、17世紀後半（作品の設定年代）におけるトリニダード島の現状など問題ではなかった。16世紀のラス・カサスが伝えるこの島の惨状³⁸⁾にどの程度の誇張があるかは別として、1595年にこの地を訪れたウォルター・ローリーも伝える、スペインの過酷な支配³⁹⁾がその後1世紀も続く中で、『ロビンソン・クルーソー』が描くように、食人種カリブ族が大挙して島に押し寄せ、食人行為にふけるような状況にはなかったことは確かであろう⁴⁰⁾。だがそれは問題ではない。デフォーにとっての問題は、そこに食人種が存在することであり、それが作者にとって必要である以上、トリニダード島は、2世紀にわたるスペイン支配の後に、依然として「食人種」の跳梁する島でなければならないのである。

ロビンソンの前にひざまずいたフライデーは、しかし、意外にととのった風貌をしていた——

その男はなかなかの好男子で、身体のバランスもよかった。大きすぎずさりとした強そうな手足…顔立も端正で、どう猛で陰険なところがない…にっこりした時など、ヨーロッパ人と見まがうほどの、愛らしいやさしさをみせる。毛は真直ぐで黒く、羊毛のように縮れてはいない…高くて広い額…肌の色は真黒というより褐色に近いが、ブラジルやヴァージニアのアメリカ原住民にみられるような、黄色っぽくて醜い、不愉快な褐色ではない…顔はふくよか、鼻は小さいが、ニグロのように平べったくはない……(208-9)

カリブ族フライデーを描くデフォーの筆遣いは、かつてバハマ諸島のアラワク族を描いたコロンプスのそれを思わせる。単にイメージの内容が互いに似ている（端正な容貌・美しい肢体）だけではなく、ここには視点の驚くべき一致がある。評価軸のプラスの極にはヨーロッパ人が、マイナスの極にはニグロがおかれる。インディアンのイメージがヨーロッパ人に近づくほど、またニ

グロから遠ざかるほど、高い評価を受けることはいうまでもない。ここで注目に値するのは、負の価値基準としてのニグロの位置であろう。上の引用文では、ニグロはブラジルやヴァージニアの原住民と共に、ただ1度登場するだけだが、ニグロの存在は3カ所にわたり、その伝統的なイメージによって暗示されている——いわく「どう猛で陰険な」顔付、いわく「羊毛のように縮れた」毛、いわく「真黒な」肌。（デフォの世界人種図では「蛮人」にも序列があり、ニグロはその底辺に位置付けられていた⁴¹⁾。）黒対白の二項対立が、中間色の褐色を白の側に取り込むことによって、維持・強化される。山崎カヲル氏がジラールに従って記述する、「基礎定立的暴力」の1例であろう⁴²⁾。

さてこのフライデーを相手に、ロビンソンは「文明化」の努力を早速はじめる。それは作者デフォにとって、説明の必要すらない自明の事柄であった。フライデーが、ロビンソン同様、固有の文化を有する民族集団の一員であり、その文化の維持発展について、イギリス人と同等の権利をもつことなど、作者の到底思い及ぶ所ではなかった。フライデーはイギリス人と同様に、英語をしゃべらねばならず（209, 213, 216）、パンを食べねばならぬ（209）。裸体は野蛮の象徴だから衣服を着る必要がある（211）、「食人の悪習」を断つためにも、山羊の肉を調理して食べることを教えなければならない（213）。ロビンソンは又、当時ヨーロッパが非ヨーロッパを支配するための、絶対条件の1つであった銃の操作をすらフライデーに伝授する（223）。そのように文明化され、言葉と技術を身につけたフライデーは、やがて食人の饗宴から救出される自分の父親と共に、「有用な」（213）労働に従事することになるが、その際うっかりすると見落してしまうのは、フライデーの父と同時に救出されたスペイン人を、ロビンソンは直接労務にはつけず、監督の地位に立たせるというありふれた、しかも奇妙な事実である（246）。

だが文明化の中心は、いうまでもなく、フライデーの改宗であり、作者もその過程を描くのに最大のスペースをさいている。ロビンソンは、フライデーが英語をある程度話せるようになるのを待って、造物主に関する問答から始める。そこですぐに明らかになるのは、フライデーがベナマキーなる老神をあがめる宗教の信者であること、またこの宗教は、神との仲介者として聖職者層をもつことであった（218-9）。ロビンソンの攻撃はまず、この聖職者層に対して向けられる。ローマ・カトリックにおけると同様、清教徒ロビンソンにとって、聖職者なるものの偽瞞性が許せなかったのである。（逆にいえばデフォはフライデーの宗教を、ローマ・カトリックに似せて描いたことになる。）いずれにせよベナマキーが「真の神」（218）であるはずはなく、ロビンソンはフライデーの「目を開く」（218）べく努力を重ねる。万能の神がなぜ悪魔を倒さないのかというフライデーの難問（220）に、ロビンソンは四苦八苦するが、キリストと天使（従って墮天使）との存在論的差違を持ち出すことで、それを何とか切りぬけ、やがてフライデーを「真の宗教的認識」（222）にみちびくことに成功する。かくておよそ3年の後には、「蛮人」フライデーはロビンソンも「速く及ばないほどの良きクリスチャンになっていた。」（222）そのようなフライデーが「食人種」の国に戻ることはもはやありえず、彼は父を島に残し、敬愛する主人ロビ

ンソンに従ってイギリスへと旅立つ。

話はたしかにうまくできすぎている。しかし問題はそれとよりむしろ、新世界の実像に対する作者の驚くべき無関心にある。フライデーは、デフォアの観念が描いた新世界人の虚像にすぎない。デフォアの宗教＝経済的世界像においては、17世紀末のトリニダード島は食人種の島でなければならず、その島の住民フライデーの宗教は、キリスト教に似て一神教であり、ローマ・カトリックに似て偽瞞的な僧侶階級をもつ必要があった。コロンブスが第3次航海の折り、衣服の着用によって特に注意をひかれたトリニダード島の住民⁴³⁾は、デフォアにとっては蛮人にふさわしく、裸でなくてはならない。ヨーロッパは、自らの必要に応じて新世界を見る。必要なものだけがみえると言いかえてもよい。『ロビンソン・クルーソー』の作者ダニエル・デフォアの「必要」は、非ヨーロッパ世界のいたる所に食人種を（アレレンズによれば）作りだしていった宣教師たちの「必要」と、どことなく似通っている——布教の劇的效果。

1967年にフランスの作家ミシェル・トゥルニエは、『フライデーあるいは太平洋の冥界』と題する小説を書いた⁴⁴⁾。この作品の中でトゥルニエは、『ロビンソン・クルーソー』をていねいに裏返していく。小説の舞台は再び南米大陸を斜めに移動して、セルカークの島、ファン・フェルナンデス諸島に戻る。そこに渡来する人々はもちろん、戯画化されたカリブ族ではなく、アロカニア族コストノス属として正確に規定される。食人行為も又、呪術的な人身供儀と交代する。フライデーはもはや、デフォアの描く「好男子」ではなく、「人間のうちでももっとも低級な」「黒人の血が混じったインディオ」(170)である。このようにトゥルニエは『ロビンソン』をいちいち裏返していくのだが、その裏返しは、もっとも重要な1点に——すなわちロビンソンとフライデーの関係に収斂する。ある日フライデーがひそかに吸っていた煙草の火が火薬に引火し、ロビンソンの洞窟——彼が島の管理中枢として営々と築いてきた城塞が、一瞬のうちに崩壊する。その崩壊はしかし、ロビンソンに、ヨーロッパ的な管理思想からの解放と、フライデーが体現する無時間的な生活様式への接近を促すことになる。ロビンソンの外貌はフライデーのそれに近付いていき、やがて2人は言語（英語とアロカニア語）と立場（主人と奴隸）を互いに交換して独特のコミュニケーションを行うにいたる。ちょうどその頃イギリスの帆船が島に立ち寄るが、ロビンソンは帰国を拒否し、船はフライデーを乗せて出帆する。一方フライデーといれかわりに船を逃がれてきた白人少年を、ロビンソンは「サーズデー（木曜日）」と名付け、2人は共に、島の永遠に身をゆだねることになる。こうしてフライデーの文明への旅立ちと、ロビンソンの原始への回帰は完了した。教化されたのはロビンソンであった。ヨーロッパの「必要」が変化したのである。

（未完）

（本稿執筆にあたり本学イスパニア語学科染田秀藤氏の御援助をいただいた。厚く御礼申し上げる。）

(注)

- 1) 林屋永吉訳『コロンブス航海誌』(岩波文庫, 1977) 38-9ページ。以下引用の後の数字は同書のページ数。
- 2) L. ハンケ (佐々木昭夫訳)『アリストテレスとアメリカ・インディアン』(岩波新書, 1974) 参照。
- 3) 増田義郎『コロンブス』(岩波新書, 1979) 169ページ以下。
- 4) 先の引用文の他87, 111各ページなど。
- 5) 増田前掲書40-41ページ。
- 6) コロンブスの日誌の原本は失われており, ラス・カサスによる要録が現存するのみである。
- 7) 増田義郎『新世界のユートピア』(研究社, 1971) 80ページ以下; W. アレンズ (折島正司訳)『人喰いの神話』(岩波書店, 1982) 68ページ以下。
- 8) 増田前掲書51ページ以下。
- 9) 「チャンカ博士がセビリヤ市へ送った書簡」(『大航海時代叢書』第1巻, 岩波書店, 1965)。
- 10) 「クリストーバル・コロン提督が…両王への伝言として…アントニオ・デ・トーレスに…与えた覚書」(前掲書125-6ページ)。
- 11) Joseph Conrad (ed. Natsuo Shumuta), *Heart of Darkness* (Kenkyusha, 1953), p. 54.
- 12) Louis B. Wright (ed.), *The Elizabethans' America : A Collection of Early Reports by Englishmen on the New World* (Arnold, 1965), pp. 105-9.
- 13) *Ibid.*, p. 178.
- 14) *Ibid.*, p. 176.
- 15) R. R. Cawley, *The Voyagers and Elizabethan Drama* (Kraus, 1966), p. 364.
- 16) D. B. Quinn, *Raleigh and the British Empire* (Penguin, 1973), pp. 170-1.
- 17) Wright(ed.), *op.cit.*, p. 161.
- 18) Chapman=Jonson=Marston (ed. R. W. van Fossen), *Eastward Ho* (Methuen, 1979), III. iii. 17-37.
- 19) Wright (ed.), *op. cit.*, p. 205.
- 20) Andrew Marvell (ed. H. M. Margoliouth), 'Bermudas', *The Poems and Letters of Andrew Marvell* Vol. I (Oxford, 1952), p. 17.
- 21) Thomas More (tr. Paul Turner), *Utopia* (Penguin, 1965), p. 136.
- 22) Arthur E. Morgan, 'Is *Utopia* an Account of the Inca Empire?' in Sir Thomas More (tr. and ed. Robert M. Adams), *Utopia* (Norton, 1975), pp. 230ff.
- 23) Cawley, 'Shakespeare's Use of the Voyagers in *The Tempest*', *PMLA* XLI (1926), pp. 706ff.
- 24) *Ibid.*, p. 711.
- 25) Frank Kermode (ed.), *The Tempest* (Methuen, 1962), p. xxxvii.
- 26) Clifford Leech, *Shakespeare's Tragedies and Other Studies in Seventeenth Century Drama* (Chatto, 1965), p. 156.
- 27) cf. Leo Marx, 'Shakespeare's American Fable', *The Machine in the Garden* (Oxford, 1964).
- 28) Benjamin Keen, *The Aztec Image in Western Thought* (Rutgers UP, 1971), p. 157.
- 29) cf. J. R. Moore, 'The *Tempest* and *Robinson Crusoe*', *RES* XXI (1945), pp. 52-6.
- 30) 'Inducements to the Liking of the Voyage intended towards Virginia..., Written 1585, by M. Richard Hakluyt the Elder...', printed in Wright (ed.), *op. cit.*, pp. 26-36.
- 31) Wright (ed.), *Ibid.*, pp. 103ff.
- 32) J. Paul Hunter, 'Friday As a Convert : Defoe and the Accounts of Indian Missionaries', *RES* (new series) XIV(1963), pp. 243-8.
- 33) Quoted in the New Variorum *Tempest* (ed. H. H. Furness) (Dover, 1964), p. 402.
- 34) *Ibid.*, p. 5.
- 35) Daniel Defoe (ed. Angus Ross), *The Life and Adventures of Robinson Crusoe* (Penguin, 1965), p. 217.

以下引用の後の数字は同書のページ数を示す。

- 36) Pat Rogers, *Robinson Crusoe* (Allen & Unwin, 1979), pp. 27ff.
- 37) J. R. Moore, *Daniel Defoe : Citizen of the Modern World* (Chicago UP, 1958), pp. 223-5.
- 38) ラス・カサス (染田秀藤訳) 『インディアスの破壊についての簡潔な報告』 (岩波文庫, 1976) 109ページ以下.
- 39) Richard Hakluyt (ed. Jack Beeching), *Voyages and Discoveries* (Penguin, 1972), p. 387.
- 40) コロンブスが第3次航海でこの島をはじめて訪れた時、彼が出合ったのは島の大半を占めるアラワク族であり、カリブ族の居住地は島の北西端 (ロビンソンの島とは反対側) に限定されていたらしい。 (『大航海時代叢書』第1巻153ページ.)
- 41) Peter Earle, *The World of Defoe* (Weidenfeld, 1976), p. 66.
- 42) 山崎カヲル「カニバリズムと他者の問題」『思想』1983年5月号24ページ.
- 43) 「…コロンが…アントニオ・デ・トーレスに…与えた覚書」 (『大航海時代叢書』第1巻) 152, 158各ページ.
- 44) M. トゥルニエ (榊原晃三訳) 『フライデーあるいは太平洋の冥界』 (岩波書店, 1982).